

日本統治期台湾の書房と公学校

—子どもの目線で見えた実態—

磯田 一雄

はじめに：日本統治期の伝統学校（書房・書堂）と近代学校（公学校・普通学校）

- 一、伝統学校としての台湾書房の実態—朝鮮の書堂・日本の寺子屋と比較して—
 - 二、ハシカの発疹と癌細胞の増殖—発足期の日本の小学校と台湾公学校の設置状況
 - 三、呉濁流『呉志明 第Ⅰ篇』に見る書房と公学校—子どもの目線から見た実態—
 - 四、ハリーポッターの魔法学校—公学校の魅力としての周辺課程（遊び）—
- おわりに：アイデンティティの危機とポストコロニアルの資産

キーワード：書房、公学校、中心文化と周辺文化、遊び、書堂

はじめに：植民地の伝統学校（書房・書堂）と近代学校（公学校・普通学校）

筆者は1980年代末から90年代にかけて、韓国や台湾で日本統治期の学校体験の聞き取りを行った経験がある。植民地期の教育体験のある人は、1930年代前半より前の生れだから当時60～70歳台の人が中心だったが、韓国と台湾でかなり対照的だったことがある。それは韓国では初等学校（普通学校）に「入学試験」があって入れないことが多かったことをよく訴えられたのに対し、台湾では中等学校の入学が困難だったことを「教育差別」の問題としてよく聞かされたが、初等学校（公学校）の入学については

特に問題がなかったように思われたことである。またこれに関連して、韓国では伝統学校である書堂にまず入って1～2年勉強してから普通学校を受けたとか、書堂だけで教育を済ませたとかいう例をよく聞いたが、台湾では伝統学校である書房の話は全く聞かなかったことである。一研究者の接しえた少数の事例に過ぎないが、実はここに植民地期の朝鮮と台湾との教育に関する異同点が垣間見られるように思われる¹。

台湾を植民地とした日本は、近代学校である小学校に範をとった公学校を設け、これを中心に「国語」として日本語の普及を図った。台湾には伝統的な教育機関である書房があったが、植民地化と共にこれが直ちに公学校にとってかわられたわけではない。台湾の書房の場合は、日本統治期の初めには、交戦で一時減少したものの、治安回復と共に復活して、相当数が存在していたが、公学校が漸増するとともに漸減して、日本統治末期にはほぼ消滅した。台湾総督府は1932年に書房の新設を禁止し、1943年に義務教育実施と共に書房を全廃する方針であったが、既に1941年に書房はわずか7校、生徒数254名と事実上絶滅したとみられている（未公認の書房がなお若干残存していたのではないかもしれないが、大勢に影響はないであろう）。

これは同じように植民地化された朝鮮の伝統

¹ 磯田一雄「朝鮮と台湾における民衆の教育意識をめぐって—聞き取り調査とその位置づけ—」『成城学園

教育研究所年報』第20集、平成10年（1998年）3月、78－117頁。

学校（書堂）と近代学校ないし植民地学校（＝普通学校）の関係とかなり様相が違っている。朝鮮では伝統学校が日本の設置した植民地学校と、植民地期のほぼ全期間にわたって共存し続けているのである。朝鮮の場合も普通学校は全期間を通じて斬増している（最後の段階では生徒数が発足当初の約60倍にも達している）が、書堂は書房の場合と違ってかなりの変動がある。日本統治以前の1883～1908年に約5000校だった書堂は、1910年代に2倍に増加している。植民地期の最終段階になっても、なお3000校程度が残存しており、生徒数も普通学校の生徒数の一割に近かった。こうした現象はどのようにもたらされたのか、歴史的背景をまず探ってみたい。

一、伝統学校としての台湾書房の実態—朝鮮の書堂、日本の寺子屋と比較して—

近代においては教育と学校がほとんど同義になったが、伝統的教育は必ずしも学校によるとは限らなかった。特に東アジアの共通教養であった漢文については、上流階級では教師を雇って家で教育したり、また親が教えたりすることも珍しくなかった。これは台湾でも朝鮮でも日本でもほぼ同じであった。植民地台湾の最初期の教育に関わった伊沢修二は、「台湾は案外教育が進んでいる」といい、「教育を重んずる一点に至っては、殆ど本国（清＝引用者註）とそれ程違ふまいと思ふ程やつて居る、大概町村に秀才が居て子供を教へて居らぬ所は無い位であります」として、大きな市街地なら書房のようなものが二三か所は有ることに触れると同時に、「金を持って居る人達は子供を教育する事には、余程注意をして、我子孫を教育する事には少なからざる金を掛けて、自ら教員を雇ふて、自分の家で教育をして居る」と述べている²。

親や祖父など近親者が教えたという例は日

本にも多い。台湾の日本語作家・張文環（1909-1978）の自伝的小説『山茶花』（1940年）は、主人公賢の従姉妹のうち、姉は公学校へ行かせず、父親がかなり高度の漢文を教育したという筋になっている。妹は公学校へ入れるのだが、その姉が結婚して婚家から妹宛に出した手紙は、公学校で学習した漢文ではとても理解できないほどの高度な漢文で書かれていたというのである。しかし自宅で肉親が、或いは教師を招いて教えるのはかなり余裕のある階層であろう。いっぽう下層階級は子どもに文字学習をさせるだけの余裕も必要なかっただろう。

台湾の書房での学習の実態としては、次のような事例が紹介されている³。

張深切の回想：登下校の時間は決まっていなかった。昼食の時を除くと、一日中薄暗い部屋に座って声を出して本を読んでいた。暗くなるのも知らずに読んで、ようやく下校になった。

陳錦標の回想（1906年書房に入る）：書房は毎日午前の勉強が終わると、家に帰って昼食をする前に、先生が生徒ごとに一々対句の作り方を教える。「天対地」「風対雨」「大对小」「東西対南北」というように。昼食を食べて書房に戻ると、家に戻る前に習った対句を声に出して先生に聴いてもらう。それがOKとなったら、すぐに字を書き始める。書いた字を先生に出して批評してもらったら、すぐに午後の本を声を出して読み始める。これが毎日必ずするコースです。

日本の寺子屋は庶民教育機関であるが、台湾の書房や朝鮮の書堂は元来科挙のための学習機関であった（女子が通わなかったのもそのためであった）。しかし許佩賢によれば、台湾の書

² 伊沢修二・講演「台湾の教育」『国家教育』第四十五号、1895年、8－9頁。

³ 許佩賢『太陽旗下の魔法学校—日治台湾新式教育的誕生』、台湾・東村出版、2012年、66頁（原文中文）。

房にも「子曰班」「三字経班」「夜間班」の三種類があったという⁴。

第一は秀才を目指すような、いわば進学組で、四書五経を習う。第二は専ら『三字経』と『幼学瓊林』を習い、読書のかたわら赤文字手本の敷き写しをする、いわば教養組である。第三は夜学で、千金譜・秋水軒の書簡や算盤、記帳のよううとして商家で必要とするものを習う実学組である。日本でいえばその教材からして「子曰班」は藩校や私塾に近く、「三字経班」に「夜間班」の内容の一部を加えたものが寺子屋に近いのではなかろうか。

もともと科挙を目指すのは社会の中のほんの一握りの層であろう。大部分の人は漢民族としての一般教養を身に付けるために書房に子どもを通わせたと見られる。朝鮮の書堂の場合でも、多くの人には『千字文』『童蒙先習』のような初歩的な漢書により読み書きを教わるにとどまっていたようである。朴來鳳の調査によれば植民地期の全羅北道の書堂214校における「漢文学教本の種類と使用順位」は次のとおりである(括弧内は百分比)。

1. 千字文	188校 (87.85)
2. 四字小学	127校 (59.35)
3. 通鑑	116校 (54.21)
4. 明心寶鑑	105校 (49.54)
5. 小学	100校 (46.73)
6. 推句	94校 (43.97)
7. 大学	78校 (36.45)
8. 童蒙先習	77校 (35.98)
9. 孟子	66校 (30.84)
10. 論語	64校 (29.91)

11位以下は15パーセント以下と急に少なくなる。この10位あたりまでが常識的な書堂のテキストではなかろうか⁵。

台湾の書房は日本統治の前に台湾全土に普遍的に存在していた。日清戦争後、日本の領土となった時点で、一時壊滅状態に陥るが、間もなく復活する。明治30年(1897)年4月の台湾総督府の調査が最も早く、1127の書房と17,066人の生徒が確認されており、翌31年2月には、書房数が1707、生徒数が、29,941となり、著しく増加している。ただし台湾の人口は当時300万といわれ、学齢児童数は60万と推定されていることから、書房に学ぶ児童は学齢児童の5パーセントでしかなかったという⁶。

言い換えれば領台直前の台湾において、仮に復活しなかった書房がほぼ同数あったとしても、生徒数は6万人足らずで、就学率10パーセント前後だったということになる。清末の台湾の識字率はおおよそ10パーセントと推定されている⁷。弘谷多喜夫も「台湾では文字の普及は、日本の近世末期の寺子屋の普及による被支配階級の識字率に比べて、はるかに低かったと思われる」という⁸。当時の台湾で字の読めるものは一部の階層に限られていたのである。台湾の伝統学校・書房の就学率も識字率相応に低かったものと思われる。

これに対して日本の伝統学校・寺子屋は大衆教育機関であり、就学率も高かった。江戸の寺子屋(江戸では「手習所」と呼んだ)の就学率は嘉永年間(1850年頃)で70~86%と推定されている。したがって、近世日本では大衆の識字率も高かった。江戸時代の日本の識字率が武士

⁴ 許佩賢前掲書、71頁。

⁵ 朴來鳳「日本統治下書堂教育の具体相Ⅴ—全羅北道を中心の一」『韓』第7巻第11・12合併号、東京・韓国研究院、1978年、146頁。

⁶ 呉宏明「日本統治下における書房と公学校」、阿部洋代表平成4・5年科学研究費補助金研究成果報告書『戦前日本の植民地教育政策に関する総合的研究』1994年、

66-67頁。

⁷ 藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、1998年、162頁

⁸ 弘谷多喜夫「日本統治下台湾の子どもと学校1895~1904年」、渡部宗助・竹中憲一編『教育における民族的相克』東方書店、2000年、28頁。

はほぼ100パーセント、大都市の町人で70～80パーセント、職人で50～65パーセント、地方では庄屋がほぼ100パーセント、小作人30～40パーセント（辺地では20パーセント）と推定されている⁹。こうした点からも寺子屋と書房ないし書堂を同列に論ずることはできないが、さらに事情が違うのは近代学校（小学校と公学校・普通学校）の普及の仕方が対照的に違っていたことである。

二、ハシカの発疹と癌細胞の増殖—発足期の日本の小学校と台湾の公学校の設置状況

台湾の書房や朝鮮の書堂のような伝統的な文字教育のための学校は、公学校や普通学校のような植民地教育制度ないし近代的教育制度の発足当初から、日本の植民地統治のほぼ終末まで、その様相は異なるにせよ共存していた。日本内地の寺子屋も小学校発足後しばらく共存していたのだが、明治30年代に入ると消滅したのと対照的である。

呉宏明は「設立当初の公学校の就学率はのびなやみ、書房の生徒数は公学校よりもはるかに多かったのである」といっている¹⁰。この指摘自体に誤りはない。問題はその意味とその後の展開である。確かに「設立当初」の生徒数は書房の方が多かったが、それ以上増加することはなく、5年後から減少に転じているのに対し、公学校の生徒数は当初からほぼ増加の一途で、設立6年後に早くも書房の生徒数を抜いているのである。

1898年（明治31年）7月28日に台湾公校令が公布されるが、同年の書房数は1707校、生徒数29,941人であつた。一書房あたり生徒数は

平均17人余¹¹、日本の寺子屋に比べて台湾の書房は一般にあまり規模が大きくなかったといえよう。これは書房の就学率が高くなかったこととも関係があるだろう。これに対して、同じ1898年の公学校数は76校、生徒数6,136人で、書房のそれよりはるかに少ない。発足当初の公学校にとって書房は手ごわい抵抗勢力だったのである。だが1904年には、書房数1080、生徒数21,661に対して、公学校は学校数153、生徒数23,178と、公学校令施行後6年で、生徒では公学校が書房を抜いている。1907年には書房数873、生徒数18,612人に対し、公学校は190校、生徒数27,464人と、以後両者の生徒数の差は開く一方である。学校数で公学校が書房を抜くのは1918年で、この年生徒数では公学校が107,695人に対し書房13,314人と、1割近くにまで減っていた¹²。

呉のいう公学校の就学率の「のびなやみ」は、公学校制度施行二年目の明治32（1899）年の「就学歩合」が2.04、施行十年目の明治40年でも4.50、漸く10パーセントを越すのは、施行20年近くたった大正5（1917）年（11.06）だった、というように「遅々たる伸び」だったことを指すのであろう。だが領台初期でも、書房の就学率は5%に満たなかった。公学校は10年足らずで、以前の書房並みの就学率を獲得したのであり、書房のそれと合わせれば、台湾全体の就学率を上げたことになる。それは植民地化により「日本の支配が浸透して行く中で、それまで民衆と無縁のものと思われていた学校に対し、人々の中からこれを求める動きも出てくる」ためと考えられる¹³。植民地教育にはそれ自体の教育目的の外に、いわば「教育要求開発効果」があっ

⁹ H.バッシン、国弘正雄訳『日本近代化と教育』、サイマル出版会、1969年、68頁。

¹⁰ 呉宏明、前掲論文67頁。

¹¹ 台湾教育会編『台湾教育沿革誌』1939年初版、復刻版、南天書局、1995年、984頁。

¹² 前掲『台湾教育沿革誌』408～410頁および984～986頁。

¹³ 佐野通夫「植民地朝鮮における教育の支配とその抵抗」、前掲『教育における民族的相克—日本植民地教育論Ⅰ』、40頁。これは朝鮮について言われたことだが、台湾にも当てはまるだろう。

たことになる。要するに、初期の20年間だけを見ても、公学校の児童数は一貫して増えているのに対し、書房の生徒数は、多少の凹凸はあれ、ほぼ一貫して減少しているのである。(なお『台湾日日新報』明治38年1月1日によれば、明治37年末の書房は約1400箇所、生徒数は約26,000人であると報道している、という¹⁴。総督府の統計より書房数にして約300カ所以上、生徒数にして約6000人以上多いことになる。これはあるいは「非公認」の書房まで含まれているためかもしれない。したがって他の年度も、実際の書房の数と生徒数は公認されたものより3～4割方多かった可能性もあるが、その点を考慮しても、明治38(1905)年には書房の生徒数が公学校に抜かれたことになるから、大勢に影響はないであろう。)

こうした状況について呉文星は次のように言う¹⁵。

……当初上層階級の家庭はよく公学校を(自分たちとは無縁の)「番仔学校」(外人学校)と呼び、その科目中漢文以外は認めず、後はみな「番仔書」とみなして、子どもたちに「夷狄」の学を習わせようと思わず、多くは書房を選んだ。(中略)しかし(日本領になって)科举の道が途絶え(清国も1905年科举廃止)、書房は伝統を固守していて、設備も十分ではなく、その課程も新しい社会の需要に適合していなかった。このため久しからずして、士紳たちも勧誘を受け入れて、新教育の潮流に従って、(旧い)教えにこだわらずに子どもたちを公学校で学ばせるしかなかった。(括弧内は引用者注) いわば苦渋の選択だったということであろう。

発足当初の公学校の就学率が低迷していた状況について『台湾教育沿革誌』はこう述べている¹⁶。

……上流の家庭では公学校を番仔の学校と称し、子弟の入学を好まず、多くは書房を選ぶといふ状態であった。それ故公学校は中流以下の子弟を主とし、これら階級の人士は国語伝習所時代に支給せる手当の廃止を口実に、容易に勧誘に応じなかった。かゝる時代に於ける学校当局の苦心は教へるといふ事よりも、寧ろ如何にして多くの生徒を集めるかといふ点にあった。

これには以下のような事情が関係している。領台初期の日本側統治者は、台湾の急速な日本化をめざしてはいなかった。台湾人に与えられる日本側の教育は富裕層に限定されるべきものだった。このために公学校の運営費は徐々に上層台湾人の負担になるように画策された。台湾公学校令(1898年7月28日公布、同年10月1日施行)第一条は「公学校ハ街庄社又ハ数街庄ニ於テ其ノ設置維持ノ経費ヲ負担シ得ルモノト認ムル場合ニ限り知事庁長之カ設立ヲ認可スルモノトス」というように、日本人教員俸給以外には地方税も支出せず、戸数割協議費や授業料など、正規の税プラス・アルファの住民負担と定めていた。この結果1897年までは全て台湾総督府より支出されていた台湾の教育経費は、1903年までにその半額が街庄の負担となり、さらに1906年までには総督府支出の三倍になった。それ以後学校の新設は地域住民の経費負担を前提としてのみ行われたのである¹⁷。

しかも公学校令は、同時に教科書検定制を設け、教育内容にも介入することを定めてい

¹⁴ 呉宏明、前掲論文67頁。

¹⁵ 呉文星『日拠時期台湾社会領導階層之研究』、台湾・正中書局、2002年、132～133頁(原文中文)。

¹⁶ 前掲『台湾教育沿革誌』238頁。

¹⁷ E. P. Tsurumi, *Japanese Colonial Education in Taiwan, 1895–1945*, Harvard University Press, 1977, p.42.

た。「台湾人の側からすれば、官の援助を受けず、自分たちで設立維持費を支弁する学校の教育内容を、なぜ規制されねばならないのか、……一部の富裕な豪紳層を別とすれば、こうした矛盾に満ちた学校が歓迎されるはずもなかった。そのため、教員たちは協議費の徴収に奔走し、生徒募集のために多くの時間を費やすこととなったのである」と駒込武はいう¹⁸。

さらに考察すべきは「就学率」の内実である。初期の公学校の就学率は、むしろ学校の普及率と考えるべきだ、と弘谷多喜夫はいう。「公学校の学区内の就学歩合が高くても、設立される学校の数が少なければ、全体としての就学率は低くなる……その意味で公学校の場合は、就学率は学校の普及率としてイメージしたほうが実際の情景に近い」というのである¹⁹。

そもそも本国日本内地の小学校と、植民地の公学校や普通学校とでは、学校の「普及率」が全く違っていた。明治日本では「学制」頒布3年後の明治8年（1875年）に既に24,303校と、あたかもハシカ（麻疹）の発疹のように、津々浦々に至るまで一斉に小学校が出現している。この年の就学率は全国平均で35.43パーセント（男50.80、女18.72）にすぎないが、就学率が90パーセントを越えた1910年でも、学校数は25,910校と相対的にはあまり増加していない（この間に琉球＝沖縄県の内地併合がある）。その後も内地の小学校数は戦前期を通じて敗戦までほとんど変わらず、二万五千校台を保っている（学校統計には本校と分校を含んでいる）。つまり日本内地では全国何処でも、近くに小学校がないから学びたくても通えないという事態は、小学校発足当初からほとんどなかったと見られるのである²⁰。

これに比べると、台湾の公学校は、あたかも

癌細胞が増殖するように、ゆっくりと時間をかけて増えて行った。発足当初わずか55校。1899年99校、1906年180校、1916年でも305校である。日本統治期の最後には900校を超えるのだが、そこまで増えるのに、ほぼ半世紀を要したのである。朝鮮の普通学校の増え方もほぼ同様である。

これから言えることは、公学校のある地域の就学率は、公学校のない地域をも含めた台湾全体の（平均）就学率よりも高かったのではないか、ということである。さらにいえば、公学校の就学率は、公学校数が一挙に700校を超えた大正末期から昭和初期になって、ようやく学校普及率とは相対的に独立した、本来の意味をもつようになってきたのではないかということである。

また書房と公学校とでも、就学率の意味が異なることになる。それにはやはり学校の「普及率」が関係している。公学校の生徒数が書房の生徒数を抜いた1903年には、両者の「就学率」（在校生徒数／学齢児童数）はほぼ同じと考えてよい。所が学校数はまるで違って、書房の数は（台湾に義務教育制度が敷かれた昭和18年の学校数を上回る）1080に対し、公学校はわずか153である。これは当時書房の方がはるかに行き渡っていたことを意味する。出来たばかりの公学校と違って、書房は清の時代から長年にわたって存続してきたのであるから、その規模も分布も数も、当時の台湾の「（公的）教育要求率」を忠実に反映しているはずである。近くに学校がないのが理由で通いたくも公学校に通えない子どもは、発足当初ほど多数いたはずだが、近くに書房がないので通えなかったという子どもは、いたとしても公学校の場合よりずっと少なかったのではなからうか。

¹⁸ 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996年、45－46頁。

¹⁹ 弘谷多喜夫、前掲論文22－23頁。

²⁰ 学校統計は『日本近代教育史事典』平凡社、1971年の付録による。

発足当初の書房の生徒数が公学校をはるかに上回っていたのは当然である。それにもかかわらず書房の就学率は、公学校発足以前でも5%を大きく越えなかった、と推定されるのということは、伝統学校に対する民衆の教育要求が、もともとその程度だったことを意味する。日本の江戸期の寺子屋に対する民衆の高い教育要求と比較にはならない。実際公学校普及の初期には「学校に遠い処の児童は大方不就学」という状況だった²¹。その一方で、書房が勢力を保っているのは「公学校の設けあらざる所に在りて唯旧来の収容生徒を維持するに過ぎず」²²ともいわれていたのである。

要約していえば、台湾では公学校発足の1898年以来、多少の曲折はあるものの、全体としてはほぼ一貫して公学校が上向き、書房は下向き傾向になっている²³。既に見たように、公学校発足7年後の1903年に、公学校の生徒数は書房の生徒数を上回っているのだが、とりわけ1917（大正6）年から1923（大正12）年の6年間は、公学校が急激に増えた時期で、327校から715校と200校近く増えている。これに伴い生徒数も約8万8千人から約21万人と2倍以上に激増している。一方書房は533校から122校へと4分の1以下に激減し、生徒数も1万7千6百人から5千3百人足らずと3分の1以下に激減している。この6年間は公学校の「隆盛」と書房の「衰退」の傾向を決定的にしたといってもよいだろう。

もっとも第二次台湾教育令が大正11年（1922年）に出された時、書房数が微増しているのも事実である。書房数は1922年に94まで落ち込んだが、翌年122に持ち直し、以後1931年までの10年間、多少上下するものの120～160の書房数

を保ち、生徒数も5000人台ではほぼ安定している。実はこの時期は公学校も、学校数は漸増だが生徒数は20～26万人台で特に前半は細かく上下するなど足踏み状態である。書房・公学校共に一種の「相対的安定期」だったともいえよう。

これは呉宏明のいうように、第二次台湾教育令に伴い、公学校の漢文科が必修から随意科になったことと関係があると思われる²⁴。漢文習得のために書房にも通う二重通学現象が起り、以後しばらく書房生徒数は（全体としては漸減の方向にあるものの）大きな変動が見られない。逆に言えば、書房は主たる教育機関から補助教育機関に変化し、公学校との併存状態を保ったのであり、名前は書房でも教育機能は大きく変化したことを示している。これに対して1933年ころから、書房の校数と生徒数の激減、次いで公学校の校数と児童数の激増が起こるのである。これは1932年11月の書房新規開設禁止政策と関連があるであろう。

これは朝鮮の書堂と普通学校の関係との大きな違いである。朝鮮でも公立普通学校は、韓国併合翌年の1911年の生徒数32,384人以来、一貫して校数も生徒数も増えており、1923年には書堂の生徒数を抜いている。その後一貫して増加し、1942年には1,779,661と、発足当初の60倍近くになる（簡易学校の生徒数を除く）。しかし書堂も1911年の校数16,540、生徒数141,604より急速に増加し、1920年に校数が最高の25,492校、1921年に生徒数が最高の298,067人に達する。書堂の生徒数は1923年には普通学校に抜かれ、1932年には142,668まで減るが、それから書堂数は漸減するものの、在籍生徒数は1942年まで15～17万名前後とほぼ横ばいになる。台湾の書房が（公式の統計上）わずか7校と事実上

²¹ 木村匡「台湾の普通教育」『台湾教育会雑誌』28号、1904年7月。

²² HK生「昨年教育事業」『台湾日々新報』1905年1月1日。

²³ 前掲『台湾教育沿革誌』408～409頁（公学校）と985～986頁（書房）の一覧表を参照。

²⁴ 呉宏明前掲論文68頁。

消滅した1941年にも、朝鮮の書堂はなお3,504校、生徒数150,184人を維持していた。大まかに言えば朝鮮書堂の生徒数は、1911年の併合直後より増えることはあっても減ることはまずなかったのである。1941年の公立普通学校生徒数は1,589,106人（ほかに63,548人の私立普通学校の生徒がいる）であるから、その約一割に相当する数の生徒が依然書堂に在学していたことになる。ただし生徒数の内実を見ると、男子生徒が漸減しているのに、女子生徒が漸増しているため、合計生徒数は年度毎に大きく変わらなかったのが書堂の特徴である²⁵。

いずれにせよ朝鮮では伝統学校である書堂が確かに最後まで生き続けた。1934年には書堂から移行させることを狙って簡易学校が発足したのだが、書堂は減るどころかむしろ増えている。簡易学校が書堂に対する教育要求に替わりえなかったということである。これは朝鮮では書堂が普通学校の予備校のようになっており、二重通学が多かったためであろう²⁶。朝鮮では最後の段階になってもなお、私立学校と並んで併合前とあまり変わらない数の書堂が生き残っていたのみならず、抗日教育を行っていた書堂もあったとされている。これに対して台湾の書房は、一貫して減少して、日本統治末期にはほぼ絶滅したのである。

公学校と書房の関係対普通学校と書堂との関係を、統計上の資料を基に、大ざっぱに比較してみると、伝統学校を含む朝鮮の教育体系に対して、植民地化された当時の台湾の固有の教育

体系は、その普及の程度において脆弱だったといえるのではないか。そもそも台湾より後に植民地化された朝鮮では、併合の翌年（1911年）直ちに「朝鮮教育令」が制定されたのに、15年も早く植民地化された台湾で「台湾教育令」が制定されたのは1919年とずっと遅れている。それは朝鮮では伝統学校のみならず、近代学校も既に公私立ともに相当に力を以て成立していたので、これに対抗するため直ちに植民地教育制度を整える必要があったためである。

これに対して台湾は、帝国日本として初めての植民地経営であったという事情もさることながら、領台当時伝統学校としての書房さえ一部の階層にしか普及しておらず、劉銘伝時期に作られた新式学校もまだ時間が短くて成果が上がっていなかった。その他にめぼしい教育機関としては、英国長老教会による長老教中学と女学校、カナダ長老教会による淡水中学と淡水女学院があるのみだった。つまり台湾総督府は朝鮮総督府ほど、現地既存の教育勢力の影響力を心配する必要がなかったのであろう²⁷。

三、吳濁流『胡志明 第I篇』に見る書房と公学校—子どもの目線から見た実態—

書房と公学校の生徒数のこのような変遷を見ると、そこに通う子供たちの目にそれぞれの学校がどのように映ったかを見ることも重要であろう。公学校では「日本語」（国語）を身に付けられるとか、書房でないと漢文を学べないとかいうことが、通常就学の意義（理由）とし

²⁵ 日本の寺子屋と違って書堂は女子を受け入れてこなかったため、1911年の普通学校発足当時の書堂在籍数は男子141,034人に対して女子はわずか570人だった。その後男子は増減があるが、女子はほぼ一貫して漸増しており、1933年に男子137,283人に対し女子10,822人と初めて1万人を超えた。1941年は男子が111,240人にまで減り、女子が38,944人と急増している。なお普通学校と書堂の生徒数に関する統計表は、車錫基『韓国民族主義教育の研究—歴史的認識を中心に—』ソウル・

進明文化社、1976年（原文韓国語）、279-280頁と呉成哲『植民地初等教育の形成』ソウル・教育科学社、2000年（原文韓国語）466-467頁に依る。

²⁶ 聞き取りでは、書堂に二年くらい学んだ後に、普通学校の試験を受けて入学したという例が多い。前掲磯田一雄「朝鮮と台湾における民衆の教育意識をめぐって—聞き取り調査とその位置づけ—」。

²⁷ 許佩賢『太陽旗下の魔法学校』台湾・東村出版、40頁（中文）。

で考慮されただろう。だがその意味や価値が、幼い子どもにはまだそれほどわからないのが普通ではなからうか。学習内容を論ずる前に考えておくべきことは、当時の台湾の子どもたちの目に、書房や公学校自体がどのように映ったかということである。幼い子どもを学校にやるのは大人であるが、そこで学ぶのは子どもである。就学率などという統計数字も、一般に民衆（大人）の教育要求の反映であると見られているが、書房や公学校に学ぶ子どもたちを引き付ける魅力の関数だともいえるのではないか。では書房と比べて、公学校の何が子どもを惹きつけたのであろうか。

呉濁流（1900-1976）の著名な小説『胡志明』の第一部（1946年）は、その冒頭部分で書房と公学校をめぐる諸相を具体的に描いている。主人公の胡志明が最初「雲梯書院」という書房紛いの施設で学び、半年ほど後公学校に転校するくだりである（呉濁流は1910年に新埔公学校に入学しているので、その前後一日本の大正年間一のことと考えられる）。そこには書房と公学校の関係をめぐって、「大人の目線」と「子どもの目線」の捉え方がいくつも輻輳して出てくる²⁸。

『胡志明』は冒頭で「九つ」の志明がおじいさんに連れられて、二里余の山道を歩いて、入学を依頼するために雲梯書院を訪ねる場面から始まる（以下現代仮名遣いに直す。（ ）は引用者の挿入である。）

書院は廟の左一棟を利用して狭い部屋に

生徒が三四十人もいた。……おじいさんは胡志明を連れて奥の部屋に入ったが、暗くて内の様子がはっきり分らなかった。……阿片吸引用の煙筒や煙斗や煙盒や煙挑等が無造作に並べられてあった²⁹。

日本の統治下になって秀才や挙人も登竜の道が閉ざされてしまった。その上清国でも1904年には科挙が廃止されている。「日本の世の中は泥棒や土匪が少なくなって道が広くなり、便利な事もあるが、もう、秀才や挙人にはなれないよ。その上税金が著しく高くなったよ」という場面はそのことに触れている³⁰。

では漢学の習得による立身出世の道が閉ざされてしまった状況の中で、なぜおじいさんはそんな山の中の書院へ小さな孫を無理に入れさせようとしたのだろうか？

村の書房が全部閉鎖された今日、漢文でなければ道を知るに由なきおじいさんの考えでは少々無理であっても雲梯書院に入れて勉強させ度かった。せめて此の孫だけでも漢文を覚えさせて道を伝えなければならぬと思っているらしい。しかし（書院長の）彭秀才は入学を一年見合せたほうがよいと云う意見だった。書房がいつ閉鎖を命ぜられる運命に遭うか分らぬ情勢下にあっておじいさんはそんな呑気な考えには賛成出来兼ねる……³¹

苦煉の花の薫る四月、胡志明は母の作った台湾靴を穿いて新しい碗帽をかぶり長い

²⁸『胡志明』は戦時中に執筆され、1946年から1948年にかけて五分冊にして台湾で刊行された。その後1956年から1973年にかけて『アジアの孤児』『ゆがめられた島』『アジアの孤児』の名での題で日本で三回刊行されたが、その際に分量がかなり削減されると同時に文章表現も改められた個所がある。なお主人公の胡志明（中国語読みでは「ホー・チミン」）が『アジアの孤児』では胡太明（ホー・タイミン）に替えられている。こ

こでは初版本の復刻版（『日本統治期台湾文学集成30・呉濁流作品集』緑陰書房、2007年）を用いる。なお許佩賢の論文や著書では「胡太明」の名で引用されている。

²⁹『胡志明』11-12頁

³⁰『胡志明』18頁

³¹『胡志明』13頁

辮髪を下げた姿で雲梯書院に入った。中途入学で孔子様と先生を拝んだだけで式が終わった。／書院と云えば如何にもりっぱに聞えるが、実際には授業料が少し高いのと生徒が年長の者であると言うだけで、その他は書房と少しも変らなかった³²。

おじいさんの思いは、この当時の中上層の台湾人のほぼ共通の悲願だったのではないか。漢文は（特に上層の）台湾人にとってはアイデンティティの源泉なのだ。それなのに、書房は「いつ閉鎖を命ぜられる」かわからぬという。次はおじいさんと彭秀才のやりとりである。

「しかし、雲梯書院は恐らく古い家風を守り切れずに閉鎖されるであろう」……

「そうだ（な）ったら漢学は滅亡です」……

「けれども学区外では書房は許すことになっているから貴兄の書院だけは大丈夫です」とおじいさんは……慰めるように云った³³。

ここには公学校と書房との関係が示されている。日本の小学校は発足すると直ちに、既述のように日本内地全土に2万数千校も出現したが、台湾の公学校は、発足時の1898年にはわずか76校、10年後の1908年に203校、台湾教育令の施行された1919年に438校、公学校も国民学校となった1941年に849校と、いわば癌細胞のように徐々に増えて行った。癌細胞が増えると（公学校が新設されると）そこ（学区）にあった書房は死滅する運命だった。そうなったら公学校に行くか、さもないと学区の外に残っている書房へ行くしかない、ということである。

胡志明が書院でした学習は、許佩賢の挙げた例と大同小異である。

胡志明は初め三字経を習った。先生は口授法により朱筆で本に赤い丸の句読をつけ乍ら朗読した。胡志明はそれについて口唱するのである。それを二回繰り返すだけで後は自分で学習し、一日三四回先生の前に立って暗誦して聞かせるのであった。／三字経は人生哲学から人文歴史等の格言が集められてある本で、勿論少年の頭では解せる筈がない。只字を覚えるだけの事だった。胡志明は家でも幾分字を習い覚えていたから三字経を学ぶのに苦労はなかった³⁴。

先生は日に三四回生徒をひとりずつ前に立たせ、学習を検討し、暗誦の出来ないものや字を覚えられないものはひどく打擲するのであった³⁵。

だが周囲のものは、志明が書院で学ぶことに賛成していなかった。

「おじいさん、志明君を学校へ出した方がいいと思いますよ。お時勢ですからな」

「なんぼお時勢でも学校では四書や五経は習えんからな」

「もう四書や五経の時代ではないと思います。その中に分りますよ。おじいさん」

（中略）

「志明君、書房はもうだめだ。幾ら出来ても時勢遅れだ。学校へ出なさい³⁶」

志明に公学校に行くことを勧めたのは、父とほぼ同世代の、警察官をしている叔父さんである。この家でもう若い世代は書房を支持してい

³² 『胡志明』 13頁

³³ 『胡志明』 20頁

³⁴ 『胡志明』 13-14頁

³⁵ 『胡志明』 16頁

³⁶ 『胡志明』 22-23頁

ないことがはっきりわかる。書房にこだわっているのはおじいさんだけだ。書房が衰退していくのも当然であろう。

公学校の先生はしきりに入学の勧誘をしていた。町に近い生徒はもう書房に来なくなって雲梯書院は急にさびれてしまった。……（書院長の）彭秀才は只成行に任せて去る者は追わずと云う態度であった。（公）学校から漢文教師に招聘する交渉はあったが彭秀才は動かなかった。刻々迫る生活難が目に見えても……。所が……西瓜の出る頃、彭秀才は突然蕃界近くの書房に招聘されておじいさんを失望させた。胡志明は仕方なく家に帰りおじいさんについて四書や五経を習った³⁷。

「街に近い生徒」が書房に来なくなったのは、書房が捨てられ、公学校に魅力を感じたからであろう。やがて近くに公学校が出来ると、雲梯書院も閉鎖に追い込まれる恐れがあるから、彭秀才はそれを見越して「渡りに船」とばかり、山地に近い（当分公学校が近くに設立されそうにない）、辺鄙な地域の書房に移ったということであろう。

彼は……おじいさんが何故彼に漢学を習わせる理由があるのか分らなかった。父胡文卿は「もう官庁では日本語の出来ない人は阿呆と同じだ」と嘆くことがあった³⁸。

この父親はもちろん志明を公学校へやりたいのだろうが、父親である「おじいさん」に遠慮してか、全然自分の意見を表明していない。つまり親に教育権がない—子供の進路を親が決め

られない、ということなのだ。だがまもなく、「漢学の素養があつて通訳が年老の気持ちに合い、話が上手」な「林先生」が、「おじいさんを説き伏せて胡志明を学校に出すことに成功した」のである。

胡志明は第二学期、公学校に入った。……胡志明は小道から広い野原へ抜け出たやうな気持ちで、学校の広い運動場や明るい教室など総べて心よく感ずるのであった³⁹。

こうして公学校へ入った胡志明は一見幸福であった。だが、公学校とそれに続く教育は期待されたような幸福を約束するものではないことが、やがて徐々に明らかになっていく。

四、ハリー・ポッターの魔法学校—公学校の魅力としての周辺文化（遊び）—

台湾教育史研究者・許佩賢は、日本統治期の台湾に設置された公学校は、台湾の子どもたちにとって、まるで「ハリーポッターの魔法学校」のように、子どもにとって学校はまさにマジックに満ちた空間であった。日本統治時代の台湾知識人は、近代という魔法に強くひかれていった」という。彼女は、この「マジック＝公学校の魅力（魔力）」について何人かの台湾人作家に依拠しながら、まず放課の休憩時間や体操などの身体活動のように、公然と遊び戯れたり大騒ぎをしたり、大声で楽しく歌う唱歌など、書房には欠けていたいわば「遊び」のような活動に、台湾の子どもたちは大いにひかれたのだという。その論拠として、前節で検討した呉濁流の『吳志明』（ただし許は『アジヤの孤児』から引用している）の外、何人かの台湾人作家の

³⁷ 『胡志明』28頁

³⁸ 『胡志明』28頁。

³⁹ 『胡志明』30頁。

作品からの引用がある⁴⁰。

一九二〇年代社会運動に従事した有名な楊肇嘉氏も、公学校時代の思い出を「学校は子どもの楽園だった」という一句で語り始めている（『楊肇嘉回憶録』台北三民書局、1968年）。台湾新文学の父といわれる賴和は、学校は自由に遊ぶ時間があるので、書房より学校の方が楽しかった、と語っている（『無聊的回憶』『台湾民報』一九二八年）。……一九三〇年代の代表的な作家の一人である張文環は小説『論語と鶏』に次のように書いている。「源（主人公の名前一筆者注）は絵のついている本が読みたい。庭で公式に遊びたい。つまり遊んでもいいと認められて、庭でさわぎたい。歌を唄ってもいいという公認のまえでこえをはりあげたい。絵の具をつかっていろんなものが書きたい。そういうような学校の生活に入りたいと思うのである。書房の教育法はあまり味気ないからである」（『台湾文学』一：二、1941年）。

こうした例からすると、子どもにとっては、まず何を学べるかよりも、「書房では遊べないが、公学校では遊べる」ことが魅力だったのではないかとみられるのである。上述の作家たちによれば「学校は子どもの楽園だった」（楊肇嘉）、「書房に比べて、学校は自由に遊べる時間があるので、学校のほうがいいと思った」（賴和）、「書房の生活はあまりにも味気ない」（張文環）というように、子どもたちは「近代」というよりまず子どもの本性である「遊び」の目線で公学校を評価したのである。子どもの側からすれば、放課の休憩時間や体操などの身体活

動のように、公然と遊び戯れたり大騒ぎをしたり、大声で楽しく歌う唱歌などは、子どもの本性に最も即した活動だが、こういうことは台湾の伝統的な教育の中では奨励されてこなかったのである。『胡志明』には山歌を蛇蝎のやうに嫌がる老人連が描かれている。いやしくも七君子や読書人は山歌などは口にしない風習であったというのである。いっぽう胡志明は公学校に入る前にこんな体験をしている。

滔々と押し寄せる文明の波に胡志明一人超然としておられるわけにはゆかなくなった。母の誕生日に親戚の子どもたちが四人庭でハトボツボの遊戲や唱歌を歌っていた。彼は仲間からはずれてきまりが悪く今までにないもう一つの世界を発見した⁴¹。

日本内地でも子どもたちによく親しまれたこの文部省唱歌「鳩」は、明治44年（1911年）の『尋常小学唱歌（一）』に登場するが、台湾でもさっそく教えられたのだろう。台湾総督府発行の『公学校唱歌』第一学年用（昭和9年=1934年第一版）には「二、ハト」がある。公学校に入ると間もなく習うわけだから、公学校の生徒は誰でもこの歌をよく知っていたはずである。こんな楽しい歌を唄いながら遊ぶなどということは、伝統的な書房では絶対ありえない。これは胡志明にとって一種のカルチャー・ショックだったといえよう。

この「唱歌」や「体操」は公学校の「父兄」に、初めの内非常に不評だったという。

本島で新教育（公学校教育＝筆者注）を実施してから、最も父兄の不評を買ったのはこの唱歌と体操（低学年は「遊戲」を含

⁴⁰ 許佩賢「殖民地台湾の近代学校」『アジア遊学』No.48、勉誠出版、2003年、42頁。許は同趣旨のことを『殖民地台湾の近代学校』（遠流出版、2005年）14～15頁

でも述べている。

⁴¹ 『胡志明』28頁。

む＝筆者注）であった。生徒自身は決して唱歌や遊戯を厭ふものではなかったが、由来本島では俳優や楽隊を賤業と見做してゐる関係上、学校は恰もこれ等賤業に就事するものを養成するが如く誤解し、子弟の品性を墮落せしめん事を恐れた。又書房教育のみを見慣れてゐる父兄には、如何に善意に解しても、遊戯は遊び事としか考へられなかったのである。体操は又将来兵士に徴集する為の予備教育と誤解し、各種の流言乱れ飛び、卒業期が近づくと、退学者続出する地方もあった。かゝる誤解は日露戦争前後まで継続されてゐたやうである⁴²。

これは公学校に対する大人（父兄）の目線と子どもの目線とが正反対になる典型的な場面である。子どもたちにとって公学校は書房よりはるかに楽しい場所だったのだ。書房が落ち目になった理由は、唱歌やスポーツに子どもたちが惹かれたからだ、とE.P. Tsurumiは指摘している。子どもだけではない。やがて親たちまで子どもたちのスポーツ行事を熱心に参観するようになった、というJulean Arnoldの観察をTsurumiは引用している。いっぽう遊戯や唱歌が子どもたちを公学校に惹きつけるのを見て、総督府は書房の取り締まりを強めていくのである⁴³。

書房が暗くて狭い空間だったのに対し、公学校は明るく開放的な空間を用意した。広い運動場や体育館、明るい教室や廊下、それに遊具など。文化施設としての学校だけでなく、その教育内容（学科）にも、大いに子どもを惹きつけるものがあつたのだ。公学校の学課には、1898年以来体操（普通体操＋遊戯）と唱歌があつたが、やがて図画工作が加わる。これらの学課は

いずれもそれを通して「国民」としての一体感を形成する教育目的があつたにもかかわらず、子どもから見れば遊びと一体化したものだった。学校ではそのほかにも、珍しい理科実験をしたり、幻燈や映画を見せてくれる。また運動会や学芸会などの行事活動もある。とりわけ遠足と修学旅行は子どもにとって極めつけの楽しみだった。張文環『山茶花』には、修学旅行に親が行かせてくれないという理由で、女主人公が公学校を退学してしまう場面がある。修学旅行が子どもにとっていかに魅力的だったかを示している。状況は時期により、地域により違いがあるが、こうした公学校の「魅力」が、就学率の上昇に表れているのではなからうか。

学校は文字（読み書き）を学ぶところ、という定義は書房や書堂、特に科挙を目的にしたような場合にはそのまま当てはまるだろうが、大衆化した近代学校にはそのまま当てはまらない。近代学校は文字文化をも含めて、多様な学習によって成り立つ場所である。教科だけ見ても、理科・手工・体操、女子には手芸・裁縫など、子ども自身が体を動かしたり表現したりする、活動的な教科（学科）が重要であり、その上に多くの教科外活動（extra-curricular activities）が導入されている。これらは学校の大衆化に対応して出現したものである。言語にしても、話し言葉は元來社会生活で学ぶものだが、それを劇などのかたちで再構成して取り込むのが近代学校である。

学校における教科を中心とした学習内容を中心文化、教科外活動のようなものを周辺文化と仮に呼んでみることにしよう。これらはカリキュラム論的には「中心課程」「周辺課程」ということになるだろう。戦後一時期教育界を風靡した「コア・カリキュラム論」は、カリキュ

⁴² 前掲『台湾教育沿革誌』238頁。

⁴³ E. P. Tsurumi, *Japanese Colonial Education in*

Taiwan, 1895-1945, Harvard University Press, 1977, pp.60-61.

ラムを基本的には中心課程と周辺課程に分けて捉えていた。この場合中心課程は一般の常識に反して子どもたちの生活活動であり、教科などは逆に周辺課程に位置付けられていた。生活活動との関連において教科内容を学んでいくということである⁴⁴。

これに対して、書房のような伝統学校には中心文化と周辺文化の区別がない。『台湾教育沿革誌』はこの状況を次のように記述している⁴⁵。

教授時間は朝より晩に至り、殆ど終日教授をなすといふも不可なし。然れども其の實際を観察するときは、其の教授は毫も規律を存せず、遊歩もなく亦休憩もなし。教師は業を授くる傍ら煙管を口にし、生徒も亦或は喫煙し或は食物を喫し、此処に笑ふあれば彼処に戯るゝあり、真の授業時間は誠に僅少なるものとす。

書房の子どもも「遊ぶ」ことはある。しかしそれは書房の中で一定の教育的配慮のもとに適切な位置づけを持っていたのではなく、学業の合間になんとなく暇をつぶしているか、或いは(『胡志明』の中でも描かれているように)通学の行き帰りに仲間と一緒に畑のものを荒らすといったようなことであって、教育的な見地から望ましい遊びではなかった。こういう事実を知ると、子どもたちの目線で学校教育に迫っていたのは、誰よりも文学者たちだったということになるだろう。

おわりに：アイデンティティの危機とポストコロニアルの資産

書房と公学校の関係について結論的にいうと、書房は中心文化(漢文教育)だけで、周辺文化

が皆無か貧相だったのに対し、公学校は中心文化(日本語教育)の周りに、豊富な周辺文化を用意していた、ということになる。台湾総督府によって書房が抑圧されていったことは事実であるが、公学校と書房の「勝敗」の帰趨は、単に政策だけでなく、そこに提示された教育の内容や質とも関連して明らかにしていく必要があるであろう。

同じ用語を用いてもコア・カリキュラム論とはいささか意味が違うが、学校教育の内部に、教科(中心文化)と教科外の諸活動(周辺文化)があるというのは普遍的な認識である。この用語を用いるならば、「公学校の魅力は周辺文化にあった。書房は周辺文化を持たなかったので子どもに訴える力が弱かったのだ」ともいえるであろう。

だが書房の方でもいたずらに手をこまねいていたわけではない。『吳志明』の「雲梯書院」の澎秀才のように、どんなに生徒が減ろうと泰然としていた師匠もいたろうが、生き残りをかけて改造しようと試みた書房もあった。公学校の「魅力」の源泉と見られた「周辺文化」を書房が取り入れようとする動きのあった事例が紹介されている。書房は既に国語、算術、行事歴を公学校のそれに合わせることを要求されていたのだが、その外の活動をも始めて、いわば「公学校化」していくのである。即ち書房には本来なかった課外活動、遠足あるいは修学旅行、儀式活動、運動会などが、地元で公開され宣伝効果があるのを見て、書房もこの影響を受け、類似の活動を始めたという。例えば1904年9月の重陽節には、新竹庁管内の書房は皆休暇にして、生徒を野外の高所に登らせたとある。これは台湾の伝統的行事を学校行事に取り入れた、かなり早い時期のことのだが、やがて国家

⁴⁴ 磯田一雄「コア・カリキュラム運動におけるカリキュラム構造型論の展開」『戦後日本の教育改革・第六巻・教育課程(総論)』、東京大学出版会、1971年初版、

2014年3版、541-590頁。

⁴⁵ 前掲『台湾教育沿革誌』967頁。

的行事活動に巻き込まれることにもなったとされている⁴⁶。

最初のころ出席督励をしなければならなかった公学校は、こうして「文明の中へ」通ずる道として台湾人の中に浸透して行った。だがまさにそこに落とし穴があった、という。台湾の子どもたちにとって、公学校は「魔法の学校のように…マジックに満ちた空間」ではあったが、「しかしその楽園は、入り口こそ美しいものの、奥には二重三重の迷路を用意していた」と許佩賢はいう。「向学心に燃えた台湾人は、この迷路の中で時に挫折感を味わい、また、しばしばアイデンティティの危機を体験させられることになった」のである⁴⁷。

日本統治時代の台湾人は、近代という魔法に強く惹かれて行ったが、近代学校としての植民地教育を通して「文明の中へ」移り住みたいという台湾人側の希求が必ずしも望み通りかなえられたわけではない。その一つが、上級学校の入学難—入試における差別の厳しさ—であった。だがより本質的できびしい落とし穴は、そのような教育を受けた結果「日本人にもなれなければ、台湾人の世界からも遠ざかってしまった」ということだった。呉志明の遭遇した苦難はまさにそれだったのである。

だがこれが「魔法」の帰結の全てであったわけではない。Tsurumiは、台湾人は植民地教育に大きな犠牲を払ったが、ポストコロニアルの時代を生きるのに、ある積極的な資産を得たことも確かであろうという。彼女が指摘するのは、国の発展には絶対欠かせないのに植民地体制では一般に無視されて来た教師や医師の養成とか、手作業に対する軽蔑が戦後の台湾では相対的に弱いこと、など主としてテクノロジーの領域で

ある⁴⁸。

さらに戦後の台湾に生じた日本語の残存使用、さらには短歌・俳句・川柳など日本語短詩による表現活動なども「抵抗の武器」として見る見解がある。日本の統治を体験した台湾人は、日本の敗戦によって「我々の時代が来た」と喜んだのだが、その期待は間もなく裏切られ、大陸から渡ってきた国民党政権による「第二の植民地化」を強いられた。これに対する一つの抵抗として、意図的に日本語を話し、さらに日本語で表現することが始まったというのである⁴⁹。

陳培豊によれば、戦後台湾における国府による国語（中国語）普及計画は「文化語学」として「北京語を通じて文化やイデオロギー政治意識を台湾人に植え付け、中国国民の創成に結びつけていこうとするものであった。……それに対して台湾人の言語観は多面性を持っていたのである。彼らは日本統治下の日本語背策には「文化語学」としての要素があったものの、自らは「実用語学」の面で日本語と接触してきたと主張しているからである」。そして既に日本統治期において、「新世代台湾知識人の支配者に対する批判の武器となったものは、ほかでもなく「日本語」そのものであった」という⁵⁰。

これは戦後台湾の日本語俳句の第一人者・黄霊芝の、何語で詠まれようと台湾人が詠めば「台湾文芸」なのだという主張にも通ずるものであろう。彼は「台湾人が日本文で綴る作品はいつたい日本文芸の範疇に入るのか、それとも台湾文芸なのか、ということをよく聞かれる。この時、私はインド人の書いた英文詩は英国の文藝なりや、と問い返す」⁵¹のである。次の川柳や短歌はその典型であろう。

日本語を本気でしゃべる終戦後 高瘦叟

⁴⁶ 許佩賢前掲『殖民地台湾の近代学校』104-105頁。

⁴⁷ 許佩賢前掲『殖民地台湾の近代学校』45頁。

⁴⁸ Tsurumi, op. cit. p.228.

⁴⁹ 若林正丈『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人—台

湾人の夢と現実』朝日選書、1997年、25頁。

⁵⁰ 陳培豊『《異心同体》の漢民族ナショナリズム』『ことばと社会』三元社、2001年、110-111頁。

⁵¹ 黄霊芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2003年、286頁。

兵の日は反日なれど短歌（うた）を詠む
今は親日の我の不思議さ 黄得龍

そして短歌や俳句・川柳などは、まさに学校教育における「周辺文化」だったのである⁵²。

52 その一例としては、磯田一雄「日本統治期台湾中等学校における周辺文化としての短歌」の第1節「皇民化期の台湾教育における短歌の利用と習得」及び第2節「校友会誌に見る中等学校生徒の短歌」を参照。『日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究』課

題番号23330229、独立行政法人日本学術振興会、平成23～25年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、2014年3月、研究代表者佐藤由美（埼玉工業大学教授）、108～120頁。